平成30年度　武雄市立山内西小学校　学校評価結果

資料

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
やる気いっぱい　笑顔いっぱい　元気いっぱい 輝く山内西の子	官民一体型学校「武雄花まる学園」「コミュニティ・スクール」（学校運営協議会制度）」を活用した地域の学校づくり

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

達成度　A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

3　目標・評価

①　知的な学校・・・知的好奇心の育成

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	・教職員の資質向上	協働的に学び合う教職員集団づくり	・全職員で授業づくりの「ステップ3」を目指す。 ・互いの指導方法や指導技術を共有化できる体制を構築し、学級経営及び授業力の向上を図る。	・「ステップ1・2・3」のチェックリストを活用した自己評価を定期的に行い、授業改善の意識の継続を図る。 ・校内研究会を月1、2回、学力向上・研究推進委員会を定期的に開催し、活用力向上に関する研究を進める。 ・全教員が仮説に基づく研究授業を行い、事前（模擬授業研修）、事後（授業研究会）の研究の充実を図る。 ・全職員で指導方法や指導技術について学び合う「先生やる気タイム」を月1回行い、協働意識を高める。 ・各職員の効果的な指導方法や指導技術、教育情報など職員が気軽に話し合える雰囲気作りに努め、教育技術の共有化を図る。	A	・年6回授業力の自己評価を行った。めあてのもたせ方や振り返りのさせかたなど、全項目で4月と比べ12月はポイントが向上した。 ・「学力向上・研究推進委員会」を定期的に開催し、組織的な研究推進ができた。各部会長を中心として部会の活動が強化され、PDCAサイクルに基づく授業実践を全教職員で行うことができた。 ・模擬授業を取り入れた授業づくりと授業研究会、「先生やる気タイム」、「スキルアップ通信」、「スキルアップコーナー」の活用など教員相互の学び合いの場を組織的・継続的に設定したことにより、学び合い、高め合おうとする協働的職場の風土を醸成することができた。	・同じ月に授業研究会が集中しないよう年間計画をたてる。 ・教員相互の学び合いの場を今後も継続する。その時間の確保のために、学級や分掌事務の合理化を図ったり、会議や打合せ等の効率化を図ったりする方策を考える。
教育活動	●学力の向上	習得した知識・技能を生活や学習で活用する力の向上	・単元テストの正答率で全学年80％以上。 ・県学習状況調査12月調査の全教科で、学力向上対策評価シートの本校到達目標を達成する（4年生は県平均以上）。 ・家庭学習の定着。各学年の目標時間行う児童の割合を80％以上。	・学習状況調査やCRT、単元テストの結果から、学校課題を把握し、児童の実態に合った指導方法、指導形態を考え、個に応じたきめ細やかな指導を行う。 ・週3回朝の時間に「はなまるタイム」を行い、学習意欲の向上を図る。 ・放課後「やる気タイム」では、職員・保護者・地域ボランティアと協力し、補充学習や発展学習を充実させる。 ・全校で統一した自主学習に取り組み、児童の意欲を喚起する。 ・「家庭学習の手引き」を全家庭に配布し、家庭への啓発を行う。 ・「学力向上だより」を定期的に保護者に配布する。	A	・学力向上対策評価シートを全教員で共通理解し、重点取組については日々の授業や研究授業の中で意識して取り組むことができた。 ・各種調査やテストの分析結果から得られた課題に応じて、少人数指導を取り入れたり、「やる気タイム」で補充強化したりした。2学期の単元テストでは全校平均86％の正答率であった。また、12月の学状調査においても、共通した対策を行い、全学年期待通りの成果が見られた。 ・「花まるタイム」や「やる気タイム」で地域や保護者とふれあい、学ぶ意欲が喚起され、授業につなげることができた。 ・全校統一した自主学習により、児童や教職員、保護者の意識の向上を図ることができた。12月の生活習慣調査では自主学習に取り組む児童の割合が80.3％となった。 ・「家庭学習の手引き」、「学力向上だより」の定期的な発信により学校の取組を家庭と共有し、啓発を図ることができた。 ・児童アンケート「家庭学習時間」87％	・活用力が向上するよう普段の生活の中で算数を意識できる「算数コーナー」の設置を行う。特に、量感を育てることを意識し、実際に触ったり、持ったり、組み立てたりできるような工夫をする。 ・学力向上のためには、心の安定が欠かせない。登校後の児童の様子の変化に即対応できるよう、朝の時間設定を工夫する。 ・授業の予習や復習を宿題にするなど、「授業と家庭学習のつながり」を意識した授業づくりや家庭学習の在り方を考える。
教育活動	・ICT利活用教育の推進	ICT機器の効果的な活用	・教育の情報化に関する実態調査において達成率100％にする。 ・全学年プログラミング学習を6回以上実施し、推進を図る。	・日々、デジタル教科書を活用した授業を行う。 ・電子黒板やタブレット端末を使った研修会を開き、職員のICT機器活用の幅を広げる。 ・年間を見通したプログラミング学習の取組を行う。 ・ICT推進リーダーがタブレットを持ち帰っての学習の実施状況を確認し、活用を推進する。	B	・1～3年生は、タブレットで、4～6年生はペッパーを使ってのプログラミング学習を6回以上行った。 ・調べ活動や学習のまとめなどでタブレットを活用している。デジタル教科書は、日頃から必要に応じて使っている教師が多い。 ・新しいアプリや、プログラミング学習についての研修を行った。 ・スマイル学習を行うよう推進リーダーが声をかけたが実施率は高くない。	・スマイル学習の日を決めるなど、実施率を上げる方策をとる。 ・英語やプログラミングなど学習内容が増えていく学校の現状を踏まえ、無理なく効果的に行えるスマイル学習のあり方を探る。

②　居心地のいい学校・・・自己肯定感の育成

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策		成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	一人一人がより良い生活を目指す指導の工夫	・生活振返り週間（西っ子よい子のくらしカード）の自己評価で、できている児童を90％以上を目指す。 ・児童一人一人が落ち着いて生活し、「学校が楽しい」と答える児童90％以上を目指す。	・低学年は、毎日振り返りを行い、保護者と協力して言葉かけを行う。 ・中・高学年は、「生活振返り週間」に、自己評価を行い、意識付けを行う。 ・職員連絡会で気になる児童についての情報の共有をする。情報の共有からケース会議につなげたり、SCや関係機関等へつなげたりする。 ・要支援児童に配慮した支援方法について、研修したり学習指導や教材を工夫したりする。 ・「ふれあいタイム」の時間で、異学年交流の機会を設ける。	B	・職員連絡会では、気になる児童の情報を共有し、SCや関係機関につなげた。 ・教育相談と特別支援教育に関する研修を行った。 ・うれしの特別支援学校の巡回相談を利用し、指導法や教材の工夫などのアドバイスを受けた。 ・ふれあいタイム、青空教室、人権の花活動などふれあい班での異学年交流活動が十分にできた。6年生がリーダーとなり下級生の世話をすることができた。 ・生活の評価はするが、生活リズムがなかなか改善できない。 ・家庭での生活リズムが確立されていないように感じる。 ・児童アンケート「学校が楽しい」91％	・青空教室や運動会なども含めて、ふれあい班での活動計画を年度初めにきちんと立てる。 ・早寝・早起きやテレビやゲームの時間を守れていないところがあるので、家庭への呼びかけを続ける。 ・委員会活動の一環として、児童が呼びかける等の活動を行う。
教育活動	●いじめの問題への対応	いじめを見逃さない環境の構築	・「やまうち合言葉」の「優しいことばを周りの人に」を意識して行動できる児童（自己評価）90％以上を目指す。	・教師も、「さん、くん」をつけて名前を呼ぶ。 ・「教育相談」「いじめアンケート」「先生あのね」を実施し、状況把握に努める。 ・毎週の職員連絡会で「気になる児童」の情報交換をし共通理解を図る。 ・「平和を考える週間」「人権週間」を設け、全クラスで人権意識の育成を目指した取り組みを行う。	A	・教育相談を年2回実施した。1回目は全員と行い、2回目は気になる児童を中心に教育相談を実施した。 ・「平和を考える週間」に、ふれあい班ごとに平和の願いを書いた折鶴を折り、6年生が千羽鶴にして、平和公園に捧げた。 ・「平和集会」で保護者によるピアノ演奏と平和に関する読み聞かせをしてもらい、平和の大切さが心に響く集会となった。 ・「人権週間」に同じ資料を用いて全学級で道徳の授業を行い、人の気持ちを考え協力することの大切さを考えさせることができた。 ・「人権集会」は、各学級のなかよし合言葉や人権標語、音楽物語の発表が充実していて、人権意識を高めることができた。 ・「人権の花」の取り組みは、思いやりの気持ちが育つよう水やりなどの世話をすることができた。 ・児童アンケート「やさしい言葉」90％	・教育相談の時間を確保したい。 ・来年度も、人権週間の中で全学級で同一資料による授業を実施し、人権意識を高めたい。 ・教師の児童の名前を呼ぶときの「くん」や「さん」が徹底していないので、共通認識のもとに取り組みたい。
教育活動	・立腰教育の推進	立腰三原則の徹底	・立腰がきちんとできる児童（自己評価）90％を目指す。 ・気持ちのよい返事・あいさつ・言葉遣い・話を聞く姿勢・はきもの揃えを意識して行動できる児童（自己評価）85％以上を目指す。	・朝読書から姿勢に気を付けさせ、放送に合わせて指導する。 ・授業前後は立腰をし、子どもたち同士で声を掛け合わせる。 ・昼休み終了後、掃除の準備ができた児童は立腰し、1分前には全児童が立腰の姿勢で開始を待てるように指導を行う。 ・掃除の振り返りの時間を設け、次につながるようにする。 ・「生活振返り」を年2回集計して様子を把握して指導する。 ・環境委員会がトイレのスリッパ並べ、掃除道具の後片付けをチェックし、放送で称賛する。 ・上級生を中心として挨拶の指導を行い、下級生に広げていく。 ・登校班や委員会別で挨拶運動を年2回し、全校朝会や学校便りで称賛し、意欲付けをする。 ・履物揃えが習慣化できるように指導を行う。	B	・立腰タイムは徹底できている。授業の始めと終わりの立腰もできているが、授業中は継続することがまだ十分ではなく指導が必要。 ・挨拶・返事・言葉遣い・立腰・履物揃えは意識して、実践できている子が増えた。 ・学校全体に委員会が呼びかけて、それを各学級でも、徹底して取り組む姿が見られた。 ・挨拶運動週間を設定し、登校班ごとに当番の日を決めて、玄関前で行った。また、委員会ごとに当番を決めて行った。 ・地域の方から、児童が横断歩道を渡った後に停まってくれた車に対しておじぎをする習慣があるので気持ちがよいと言われている。 ・児童アンケート「掃除前の立腰」84％・「履物揃え」94％	・立腰タイムだけではなく、立腰の姿勢が持続できるように、立腰のよさを児童に伝える。 ・ ・トイレのスリッパは、常に指導しなければ並ばなくなってしまう。基本的な習慣は、継続して指導をするしかない。 ・挨拶週間や履物揃え点検など、継続する。 ・立腰の指導を6年生が下学年に行う時間を設定する。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務・教育活動の効率化	・定時退勤日の取組を確実に行う。	・金曜日を定時退勤日とし、16時以降の行事を設定しない。 ・定時退勤日のPTA行事を設定しない。 ・定時退勤日に不測の残業があれば管理職に申請する。 ・必ず業務改革を行うよう業績評価表に各自目標を挙げる。 ・級外の職員が、環境の整備等の担任を支える取組を行う。	C	・管理職が率先垂範し、定時退勤を促している。 ・タイムカードの使用により、残業時間の実態が明らかになり、残業を減らそうという意識が高まっている。定時退勤日が実質化してきている。 ・PTAの役員にも金曜日は会議を設定しないことが理解されている。	・今以上に定時退勤日を徹底するとともに、他の日においても残業を減らすよう努力する。 ・月残業45時間以内を目標として職員がそれぞれに業務改善の意識をもつ。

③　元気な学校・・・挑戦心の育成

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策		成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体力つくり	体力向上を目指す意識の向上	・健康的な生活を意識させ、早寝早起き朝ごはんの取り組み90％以上を目指す。 ・全ての学年で、スポーツチャレンジに1種目以上取り組む。	・「西っ子よいこのくらしのカード」「生活振り返りカード」等を用い、子供や保護者に早寝・早起き・朝ご飯の意識付けを図る。 ・なわとび旬間中、コーナー掲示を行う等して、児童の意識を高め、自主的な練習を促す。 ・昼休みに全校でスポーツチャレンジに取り組む場を設定する。 ・班登校を継続し、自力登校率90％以上になるよう、入学式やPTA総会等で保護者に自力登校を呼びかける。 ・清潔検査を月曜日に行い、結果を放送して意識を高める。 ・手洗い、うがい、歯磨きを放送等で呼びかけ、習慣化を図る。	B	・生活振り返りカードを用いて5月と11月に得点集計を行った。どちらの項目も11月の結果を向上させることができた。 ・なわとびコーナー掲示を行い、各クラスの結果を見えるようにすることで、昼休みなどに自主的に練習して、結果を更新している姿が見られた。 ・スポーツチャレンジを各学年3回ずつ実施した。4年生は県の奨励賞をいただいた。 ・自力登校の呼びかけが足りず、自力登校しない児童もいた。 ・児童アンケート「自力登校」88％「体力づくり」90％ ・週1回、清潔検査結果を放送し、手洗い・うがいを行うよう意識をもたせることができた。また、給食後の放送で歯磨きの習慣ができた。	・自力登校については、保護者に通信等で呼びかけるなど、定期的な啓発が必要である。 ・手洗いやうがい等については、インフルエンザの流行期に重点的に行い、感染拡大を防ぐよう心掛けていきたい。
学校運営	・地域の学校づくり	「コミュニティー・スクール」及び「官民一体型学校」としての開かれた学校づくり	・地域の学校として、学校運営協議会の提言を受けての学校運営を行う。 ・民間学習塾と組んで地域人材を活用し、開かれた学校づくりのアンケートで90％以上にする。	・学校運営協議会で校長の考える学校経営を説明し、地域の提言や地域人材からの提案を具現化する。 ・年間の地域人材活用のリストを作成し、計画的に協力を要請する。 ・花丸タイム実施にあたり、保護者の当番表を作成し、すべての保護者に協力を依頼する。 ・公民館と連携して、花まるタイムのボランティアや授業で協力してもらえる地域人材を確保し、活動の定着を図る。	A	・今年度から花まるタイムが始まった。多くの地域の方が来校され、協力していただいている。保護者にも年間2回の当番を協力していただいている。 ・家庭科ボランティアや丸付けボランティア、生け花体験、焼き物体験など、地域人材の活用ができた。 ・地域人材の活用には時期を逃さず連絡調整が必要であり、依頼した時期が少し遅れたこともあった。 ・保護者アンケート「開かれた学校づくり」92％	・地域の人材活用計画を職員室内に掲示し、常にどの時期にどのような学習をすればよいか確認できるようにする。 ・今年度の反省点を確実に次の担任に伝えるために、新旧担任の引継連絡会を行う。

4　本年度のまとめ　・　次年度の取組

①知的な学校【知的好奇心の育成】について

佐賀県の児童生徒の活用力向上研究指定2年目であった。校内研究及び職員研修を通して授業改善に取り組み、授業公開と協議会を実施してICT機器等を活用した授業実践に全職員が取り組んだ。これにより教師の資質向上に向けた意識が向上し、協働的職場風土の醸成につながった。
次年度は、新たな課題を設定して新学習指導要領への移行に向けて準備を進めたい。

②居心地のいい学校【自己肯定感の育成】について

いじめはあるもの、不登校になる児童はいるものという意識を常にもちながら児童観察と初期対応に取り組んだ。児童間のトラブルや不登校はあったものの、事案に対して組織的に対応することで、当該児童の保護者と一体となった善後策を講じることができた。
次年度は、さらに外部関係機関との連携を活用して、いじめや不登校の防止策及び対応策を講じたい。

③元気な学校【挑戦心の育成】について

今年度は、民間学習塾と連携した「武雄花まる学園」としてスタートした。地域住民・保護者の方々が教室に入って学習支援をして頂いたことで、児童の意欲は高まった。また、多岐にわたる地域ボランティアの支援も継続できたことで、地域とともにある学校づくりを推進することができた。
次年度は、地域住民の支援形態を整理しながら、さらに元気な学校づくりに努めたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目